

東京都立大学

文学博士

次良丸陸子 Internal-External Locus of Control
の行動分析

本研究は、人の行動が、その個人とその個人をとりまく社会的環境条件の相互作用によって決定され、環境的要因がパーソナリティ研究の1つの重要な側面であるという前提のもとに、次の理論的仮説を設定した。つまり人の行動は、ある個人が社会的な強化を受けて形成された人格変数（ここでは内的統制型・外的統制型）とその人格変数をもつある目標に対しての付随した価値に依存していると考え、この人格変数としての内的統制型・外的統制型の概念の有効性を検討吟味した。

本論の全体は、理論的考察にはじまって、J-R 式、I-E 尺度（次良丸—ロッター式内的・外的統制型尺度）の作成、11種の調査及びテスト、13種の実験から構成されたものである。以下、研究結果を示すことにする。

(I) J-R 式、I-E 尺度の作成

この尺度は、Rotter, J.B. (1966) の I-E scale をもとに日本人の性格特性、社会的、文化的な特徴をいかにして選定した49項目よりなる性格テストである。49項目の中には、10項目の虚構尺度、7項目の中性尺度が挿入されている。I-E 項目は内的統制型・外的統制型を十分測定しうる項目ということに主眼点をおき、一応、おかれている状況にかかわらず、定常的に把握される人格変数を測定する項目である。この J-R 式、I-E 尺度をつかって研究を進めた。

(II) 内的統制型・外的統制型のパーソナリティ特徴

J-R 式、I-E 尺度で選び出された個人(内的統制型・外的統制型)について、そのパーソナリティ特徴を明確化した。その結果、内的統制型・外的統制型の概念と生物学的基礎をもつパーソナリティとのあいだには、特に明確な関係は見出されず、この人格変数は人の発達過程で形成され、さまざまな環境的要因によって強化され発達すると結論づけられた。また、これらの人格変数のもつ性格特徴を示すと、内的統制型は外的統制型に比較して、社交性に富み、劣等感・失敗感が少なく神経質の傾向がない。また、自尊心が高く、自己に対して自信と尊厳をもっていて想像力に富み、鋭い機智があり、理知的で思考が明晰。責任感強く徹底性があり、進歩的で自発的。誠実味があつて倫理的、道徳的問題に対して敏感。また、他者に追従する傾向

がなく自分で判断して結論を出す。

(III) 内的統制型・外的統制型の行動分析

実験的研究に基づいて、内的統制型・外的統制型の個人が、行動にどのような影響を及ぼすかという問題を検討した。その結果、① 内的統制型は現実的な要求水準を設定し、外的統制型は非現実的な要求水準を設定した。② 挑危険行動の測定の結果、内的統制型は、ギャンブルで多量の金額を賭け、その獲得金額も高かった。③ 価値に関する認知閾の知覚実験においては、内的統制型・外的統制型ともに人格変数としての内的統制型・外的統制型に関連のある語に対して高い価値をもつ傾向のあることが見出された。④ 連想実験において、内的統制型は内的統制型に関連のある語に対して同価値反応を示し、肯定的評価をもつ反応が多かった。他方、外的統制型は外的統制型に関連のある刺激語に対して、同価値的反応および肯定的な評価をもつ反応が多かった。⑤ 前述の結果に相対して内的統制型は外的統制型に関連のある語、外的統制型は内的統制型に関連のある語に対して反価値的反応、否定的な評価をもつ反応語が多かった。⑥ また、外的統制型は内的統制型に比べて不安傾向が高く、それに比べて、内的統制型は不安のためにかえって遂行行動が促進される不安因子が見出された。⑦ 学力については、内的統制型・外的統制型と学業成績との相関は、無相関であり、知能指数との相関も低かった。⑧ 内的統制型・外的統制型の文化人類学的考察によって文化的所産が社会的事象に対しての個人の認知の仕方を異にすることが明確化された。

名古屋大学

教育学博士

増田末雄 思考過程の研究 演繹的推理のメカニズム

本研究の目的は、言語を媒介とする演繹的推理（特に、三段論法形式）のメカニズムを明らかにしようとする。

本論文の構成は以下のものである。

第一部 序論 1. 緒言 2. 研究経過 3. 本論文の構成 第二部 本論 第一章 演繹的推理に関する諸問題 1. 児童における演繹的推理 2. 成人における演繹的推理 3. 演繹的推理に影響する心理的要因 第二章 演繹的推理における課題形式 1. 論理学的側面からの考察 2. 文法論的側面からの考察 3. 言語学的側面からの考察 第三章 演繹的推理における名辞の機能 1. 熟知度の差異に基づく名辞の組合せ

2. 名辞の組合せに一定の関係が成立する場合 3. 名辞の組合せに一定の関係が成立しない場合 第四章 演繹的推理における結論の補充 第三部 結論 第五章 結論と討議 第六章 演繹的推理モデル 第七章 今後の問題と展開

第一部においては、本研究の重要性とその根拠を述べ、演繹的推理に関してのこれまでの動向と研究経過を概括した。

第二部は、文献的研究と主題に関する実験的研究の分析と考察である。課題の形式に関する考察と課題を構成する名辞の機能と結論の補充に関する考察が主要項目である。

課題形式の分析は論理的側面からは格的分類、文法論的側面からは、名辞主語的、客語的、関係語的用法により、また言語学的側面からは、日本語と英語の比較考察により進めた。これらの結果から、論理的側面からの格分類による P.M.S の結論への影響が、文法論的側面からの用法別の結論への影響と一致する傾向が認められた。然しながら、これらの一致の傾向は同国語内においてより顕著である（対象は小学校3年生（8才）、小学校5年生（10才）、日本児童、米国児童）。また、32種の課題形式に関して、結論に導くパターンは、同国間における類似性が、同年齢間の類似性を凌駕していた。以上の結果は、言語を媒介とする思考の特徴を示し、さらに、言語の特質を明らかにしているように思われ、現在提起されている。心理・言語学の基本的な考え方と一致する方向である。

第三章からの名辞の機能に関しては、熟知度の差異による名辞の組合せでは、結論の選択が影響されなかったが、名辞の組合せに一定の関係が成立する場合には、問題の困難度に比例して、結論の選択が名辞間の関係成立に依存するようである。これらの結果は、有意味語による名辞の組合せの拡大実験とさらに無意味綴の対連合学習による有意味化の手續を加えることによって確かめた。

また、名辞間に一定の関係が成立しない場合には、結論の選択に差異が認められなかった。第四章では、演繹的推理における結論が課題外から選択される場合を結論の補充と呼び、どのような方向でなされるかを明らかにしようとした。この種の研究においては、正答、誤答に分類した場合に、誤答の中のその他に属する項である。このような場合の結論としての名辞の補充は、課題内の名辞の組合せに一定の水準で有意味化するような方向でなされ、課題の困難度に比例する。

第三部は結論をまとめ討議を進めた。第六章において、これまでのこの種の形式における推理モデルを

りあげ、問題点を指摘しつつ、本研究の結論から、正答が導かれる場合と誤答になる場合の2種の推理モデルを提案した。

本研究は、三段論法形式の推理問題を単純化して与え、課題形式、名辞の機能、結論の補充についての数多くの実験を重ね、多くの知見を得ることができ、さらに、日本語の機能の解明が必要であることと同時に、言語の人間への影響を示唆しているように思われる。

名古屋大学

教育学博士

久世敏雄 青年心理研究の方法論

この論文は、わが国の青年心理研究および研究方法の現状をふまえて、青年心理研究の在るべき方法論を探求することを目的とした。

第1章では、青年心理研究の現状を青年心理記述の現状および青年心理研究の現状に関して検討した。(1) わが国の青年心理学に影響をおよぼした諸理論、(2) 「教育心理学研究」に発表された青年心理研究について、前者は方法論的特徴、精神発達の記述および現代的意識の観点から、後者は当該研究が説明的、歴史的、操作的および理論的接近をしているかの観点から分析したところ、1970年代の青年心理研究は、説明的接近を目指し理論的接近をする研究のみみられるが、(1)の諸理論に基づく研究はなく、この現状に関して、青年心理研究は、その理論的枠組をどの理論に求めるべきかの討論を行った。

第2章では、青年心理研究の方法の現状を方法記述の現状および研究方法の現状に関して検討した。青年心理研究の方法として記述される観察法、質問紙法、日記法および自叙伝法は、その共通な特質として特定の操作を加える実験的方法をとらず、自然的条件のもとで研究を推進する特徴がみられた。研究方法の現状分析を学会発表および「教育心理学研究」に発表された青年心理研究に関して行ったところ、質問紙調査法が最も多く使用されており、この質問紙調査による研究は、研究の狙いから実態調査的、事例調査的ならびに検証的調査研究に分けることができた。

第3章では、第1章および第2章で明らかにされた青年心理研究の現状および研究方法の現状をふまえて、青年心理研究の理論的枠組の検討を行い、調査的研究—質問紙調査法による3段階分析法を提案した。質問紙調査法は、仮説検証の有無により実態調査的研究および検証的調査研究に分けることができ、また、